

## 遠藤隆吉と水戸学

遠藤隆吉研究所 所長  
政策情報学部 学部長  
教授・朽木 量

## 遠藤隆吉研究の現状と課題

- 現在、遠藤の思想について自己流の解釈が横行  
朱子学的な儒学観や新渡戸の「武士道」を安易  
に引用⇒結果的に遠藤の思想とかけ離れる
- 思想史・歴史学的研究の方法論  
典拠を明示した著作の精読と、史実に基づく思想的系譜  
の検証（実証主義）  
論拠のない実証されない勝手な解釈は単なる「妄想」  
「妄想」は科学ではない、学問ですらない
- 遠藤の思想を身近に普及させるために  
遠藤研究所は学術的かつ分かりやすく伝える
- 本日は遠藤隆吉研究所の最近の成果をご紹介しつつ、さら  
に「実学」とは何かについて深めていきたい。

# 遠藤隆吉とは



- 千葉商科大学の建学者
- 1874年10月2日前橋藩士族 遠藤千次郎・はる夫妻の長男として現在の群馬県前橋市神明町で生まれた。
- 1892年、群馬県尋常中学校を卒業。第一高等学校で学び、その後、東京帝国大学文科大学哲学科に進んで、1899年に卒業。
- 翌1900年、東京高等師範学校講師に就任
- 1910年5月、私塾「巣園学舎」を設立。
- 1922年4月、旧制巣鴨中学校を創立。
- 1928年2月、巣鴨高等商業学校（千葉商大の前身）の設立認可
- 1946年2月5日、脳梗塞により死去。

# 日本における儒学とは

- **朱子学** (朱熹→京学の林羅山・木下順庵、南学の南村梅軒)  
大義名分・儀礼を重視 封建的支配を正当化  
性即理 この世の秩序 (**天の理**) に従って生きる  
⇒**観念論的** 形式的で硬直的な合理主義 静態的世界観
- **陽明学** (王陽明→中江藤樹)  
心即理 理を外に求めるのではなく自らの心の内に求めるべき
- **古学** (古義学：伊藤仁斎、古文辞学：荻生徂徠)  
朱熹・王陽明の解釈だと批判、四書五経などの古代聖賢の書に直接あたり、真意を汲み取るべき  
**天の道** ⇒**経験論的** 日常世界に根差した実践知 動態的世界観  
「道はなお路のごとし。往来やまざるをもって、故にこれを名づけて天道という」 (『語孟字義』巻上-14)  
「人倫日用まさに行くべきの路」 (『語孟字義』巻上-27)  
**経験に基づく実用主義⇒経世論** (太宰春台)

# 水戸学とは

- 水戸学：水戸藩で形成された学問
- **前期水戸学**：2代藩主徳川光圀によって『大日本史』の編纂を通じて形成
- **後期水戸学**：9代藩主徳川斉昭のもとで尊王攘夷思想を発展させ、明治維新の思想的原動力となる。
- 儒学を中心に、国学・史学・神道を折衷した思想
- 主要人物：**藤田幽谷・藤田東湖・会沢安（正志斎）**

## 水戸学と古学

- 会沢安はとくに伊藤仁斎を高く評価していた。
- 「伊藤仁斎は徳を尚び行を修め、当代の儒宗たり。はじめ古学を發明し、後人の説と聖徑とに同異あるを弁ず。而して拡充・長養の旨、日用常行の義を論ずること、きわめて祥明なり」（『下学通言』巻2-304）
- 「伊藤氏 古学を唱へ、天地を以て活物となす」（同前-320）
- 「おもふに、天地は活物にして、人も亦活物なり」（『新論』下-187）
- 蘭学の合理主義は世界を死物とみなし、理性では知りえない領域を否定→神の否定になるとして批判（『下学通言』巻1-233、『迪彝篇』-350）

## 遠藤前史～前橋藩の儒学①～

- 酒井氏に代わって前橋に入封した松平朝矩（前橋松平家五代目、初代川越藩主）は、まもなく**木門派**（木下順庵）の室鳩巢の高弟河口静斎を召抱えたが、藩校は創設されず。
- 藩校が創設されるのは1827（文政十）年前橋松平家8代目・4代目川越藩主の松平斉典の時に、「講学所」と称し、**朱子学を正学**とし、異説を禁じている。斉典の死後、1855（安政二）年には一年間の休校を余儀なくされるまで衰退。

（『前橋市史』第三巻p. 803）

## 遠藤前史～前橋藩の儒学②～

- 前橋松平家10代目・川越藩6代目藩主の松平直侯の治世になると講学所は再整備。
- この改革を推進した松平直侯は水戸の徳川斉昭の実子、水戸学の影響は少なくなかった。
- 次の藩主松平直克にも引き継がれることとなる。
- 松平直克：久留米藩9代目有馬頼徳の子、長兄の10代藩主有馬頼永は水戸学を奉じる「天保学連」を重用
- 前橋帰城の前年、1866（慶應二）年3月前橋城大手馬出し外の陣屋を講学所として整備、1868（明治元）年12月、博諭堂と改称（『前橋市史』第3巻p. 811-815）

## 遠藤前史～前橋藩の儒学③～

- 1872（明治五）年に学制が発布されると藩校は廃されたものの、博諭堂の敷地に一番小学校厩橋小学校が新設された。教員も多くが実質的に継承。（『前橋市教育史』上巻p.105）。
- 1881（明治十四）年には群馬県立前橋中学校の初代専任校長として、**水戸学の泰斗である内藤耻叟を招聘**（『前橋市史』第四巻p.494）
- 博諭堂を中心とする旧藩時代の漢学教育は、明治以降の近代教育の初期においても引き継がれ、大きく影響していたといえる。

## 遠藤隆吉と水戸学

- 中学の恩師、中西弘造（水戸に遊学した元博諭堂助教）
- 「私は中学の四年頃には藤田東湖の正気歌であるとか、弘道館記述義であるとか云ふやうなものを精神を引き立たせるものとして愛読して居った。それが今日になっても身心の滋養分になつて居るのであらうと思ふ」（『巣園自伝』 p.29）

## 遠藤隆吉と水戸学

- 父千次郎は「**藤田東湖を推賞して居った**が、時々言ふて居た。興国院様（厩橋城主にして水戸より養子に來られた方）が御養子に來られる時には藤田東湖が家老山田氏の許に度々手紙を寄せられ、山田家には沢山あった筈だが如何したか惜しむべきである」と述べたり、「東湖は安政二年の地震に一旦は出たが、老母の居るに気付き更に入つて之を救ひ出し身を以て梁を支へ、死んで了つたのだといふことだが親孝行のものだと非常に感服して居た」
- 「此れ等の**事実如何は保証の限りでないが、私に取つては一種の刺激**となつたらしい」（『巢園自伝』p.12）

## 遠藤隆吉と古学

- 『学問概論』で伊藤仁斎・荻生徂徠を繰り返し引用
- 「漢文であれば徂徠を学び、社会学ではアメリカの心理学派から影響せらるゝこと多大であるといふ具合だ」（『巢園自伝』 p.104）
- では、古学の中での実学・実践知とはどのようなものであろうか→古学と水戸学における実学について考えてみる

## 伊藤仁斎の動態的世界観

- 道は往来を以て言ひ、理は条理を以て言ふ。故に聖人、天道を曰ひ、人道を曰ひ、未だ嘗て理の字を以て之に命ぜず。（『語孟字義』巻上-30）
- 道の字は本活字、其の生々化々の妙を形容する所以なり。理の字のごときは本より死字、（中略）以て事物の条理を形容すべきも、以て天地生々化々の妙を形容するに足らず。（同前-30）
- 条理に適った合理的で普遍的な道德観念ではなく、社会的で関係論的な社会哲学

## 伊藤仁斎の実践知

- 孔子の「下学上達」
- 下学は猶 平地上に在って行くがごとし。循循として止まざるときは即ち能く万理の遠きに到る。  
（『童子問』巻中 - 149）
- 日常の経験世界の中に真理を求めて、その中を循環しつづけることで、**現実離れした空理空論でなく実践知を習得**できる

## 荻生徂徠の経験主義的な実践知

- 後世の儒者は知を尚び、理を窮むるを務めて、先王・孔子の道 壊れぬ。理を窮むるの弊は、天と鬼神と、みな畏るるの足らずとし、しかうして己はすなわち傲然として天地の間に独立するなり。  
(『弁道』 - 30)
- 理性だけを頼りにして、机上の知恵を貴ぶ合理主義者の学者は、社会の複雑さや人間の多様性に基づき経験的に積み上げられた「先王の道」を破壊し、傲慢なエリート主義に陥るとして批判
- 人間が理性によって知ることができるのは経験世界のごく一部に過ぎない。

## 水戸学・藤田幽谷の実践知

- 後世の儒者は、徒に道德仁義を談じて、功利を言ふを諱み、富国強兵は黜けて覇術となす。（『丁巳封事』-27）
- 経済談義や富国強兵などの現実社会における実践的な議論をしりぞけて**道德仁義などの机上の空論ばかりに耽溺する学者を批判**

## 水戸学・会沢安の実践知

- 天下を死物として、千年万年も質のみにて治めらるると思ふは紙上の空論（『読直毘靈』-41）
- 凡そ聖賢の法は、其の意は美と雖も古今宜しきを異にす。其の跡に必ずしも泥むべからず。其の意は即ち以て師法とせざるべからず。斟酌損益して、之を活用するは其の人にあり。他は皆之に倣へ。（『下学邇言』巻2-274）
- 制度を時代に応じて適宜改変することの重要性に言及

## 遠藤隆吉の実学～建学の精神～

- 遠藤隆吉「建学の趣旨」全文  
能力を外にして長幼の序を認め、為にする所なくして人格の光を仰ぎ、**天道の自ら至るを恐れ人倫の當に依るべきに従う**。人類を一視して其の幸栄を増進し、**有用の學術を修め**質実の気風を養い、適く所として其の天職を完うせんとす。（『巢鴨精神』 p.6）
- 古学派や水戸学のいう「天道」と「日用人倫の道」に従い、有用な実践知を身に体する

# 遠藤隆吉の実学～生々主義哲学～

- 元来は『易経 繫辞伝』「生々之謂<sub>レ</sub>易」からくる
- 社会学、哲学、東洋思想史、教育学、政治学、心理学など多岐にわたる研究をした遠藤隆吉は、「種々の学問をやって一種の共通的真理に到達」するに至った ⇒生々主義
- **三綱領**
  - 一、哲学によって万物を畏敬し、
  - 二、修養によって平等に行動し、
  - 三、倫理によって発達を誘発す。
    - \* 第一に万物は生々流転するがゆえに測り知ることは出来ないため、万物を畏敬するべきであること
    - \* 第二に人間も測り知ることは出来ないので平等に扱うべきこと
    - \* 第三に人間は発展することを望んでいるのでそれを助けるべきこと
- 三綱領に基づく思想と生活信条が渾然一体となって結実したものが生々主義で、「生々示字碑」に刻まれている
- 常に変化し続ける「天の道」 「生々化々の妙」に通じる動態的世界観

# 生々示字碑



## 遠藤隆吉の実学～实用教育の排斥～

- 我々は**實用主義には勿論賛成**である。（『教育及教育学の背景』 p.176）
- 殊に**近來は其の實用主義を極端にまで行ひ、社會と學校との接近と云ふことを奨勵して居るのである**。併ながら實用主義の一面には又必ず**裝飾と云ふことが伴ふて居らねばならぬ**。何となれば今日の實用主義の教育と雖も**禮儀と云ふことは喧しく言ひ、作法と云ふことも喧しく言ふ**。即ちそれだけ遙か**裝飾が存在して居るのである**。（同書 p.177）

## 遠藤隆吉の実学～实用教育の排斥～

- 私は**实用主義の教育に反対**である。世の教育者は児童が**实用をなすのを好まない**。飯を炊く真似や田を植うる真似 凡て真似事を喜んで居る。此の如き**实用主義は児童を浮薄に導く所以**である。（『教育及教育学の背景』 p.1）
- **身に体する方面の实用主義は極めて良い**。（同書 p.194）
- 私は現代の**真似事主義なる实用教育を排斥せんとするものである**。その位の浮いた常識は知る必要はない。**其の暇には古典を学ぶに如かざるもの**となすのである。（同書pp.200 – 201）
- 真似事の常識で学んだ気になるのではなく、古典から「**精神の装飾**」を学ぶとともに、**実社会で得られる「実践知」**を身に体することが重要

## 遠藤隆吉の実学～実践哲学と儒学～

- 今それ支那の哲学は、西洋の哲学と異り、実践を主とし、又感情を主として論究せらるゝが故に、始より吾人の感情状態に適するが如き結論を示し、従って実践の目的の爲には、忘れんと欲するも得ざる所のものがある。是れ支那哲学の特色であつて、其歴史的価値あるのみならず、今日に於いても亦、実践的価値ある所である。（「実践哲学の意味と支那哲学」『新佛教』11（9）－1050）

## 遠藤隆吉の実学～一貫の思想～

- 禅宗であるとか、哲学であるとか云ふやうな學問に關することは別としても、彼の福澤先生が獨立自尊と云ふことを言はれた、此の獨立自尊と云ふことは何を意味するか、即ち實際上の心得を示したのである。此の心得を以て如何なる場合にも實行するやうにと言ふのが先生の趣意である。（『東洋倫理学』－202）
- 禅宗に於ても、哲學に於ても、又家康や福澤先生のやうな偉人豪傑に於いても、一貫の思想は認められて居る、それであるから彼の道德を以て起り、道德を以て其の教義の中心として居る儒教に於て豈に獨り一貫の思想なからんやで必ず何等か一貫の思想が無ければならぬと云ふ事は先づ注意せらるゝことであると思ふ。（『東洋倫理学』－203）

## 治道家

- 治道なる言葉があるが、この言葉は政治と教育との両者を包含している。今日の社会においても、やはり治道家なるものがなければならない（『硬教育』 p.3）
- 教育学者必ずしも教育家にあらず、学者必ずしも達見家にあらず、政治家必ずしも教育学とに詳かなるにあらず。社会の病弊を洞破し、全体の上より一部を観察するは治道家にあらざれば能はず（同書p.3）

## 100年いきる良識を。

- 治道家とは文明の進歩と国家の発展に寄与すべく、学問・教育・政治といった枠組みを超越して、社会の諸課題に対して全体を俯瞰しつつ対処できる人物
- 真似事の実用教育を排斥した遠藤の真意を汲み、**実社会に根差した「実践知」を身に体して**、生々変化する現代社会の諸課題に、**有用な学術**を活かして全体を俯瞰しつつ果敢に取り組む人材を育成していくことが「実学教育」に求められているのではないのでしょうか。

## 参考文献

- 会沢正志斎「新論」「下学邇言」「読直毘靈」「迪彝篇」高須芳次郎編『水戸学全集 第二編 会沢正志集』1933年 日東書院
- 伊藤仁斎「語孟字義」『日本思想大系33伊藤仁斎』1971年 岩波書店
- 伊藤仁斎『童子問』1970年 岩波文庫
- 遠藤隆吉『東洋倫理学』1909年 弘道館
- 遠藤隆吉『硬教育』1910年 富山房
- 遠藤隆吉「實踐哲学の意味と支那哲学」1910年『新佛教』11 (9) pp.1048-1053
- 遠藤隆吉『教育及教育学の背景』1926年 富山房
- 遠藤隆吉『巢鴨精神』1935年 巢園学舎出版部
- 遠藤隆吉『巢園自伝』1938年 巢園学舎出版部
- 荻生徂徠「弁道」『日本思想大系36荻生徂徠』1973年 岩波書店
- 朽木 量「巢鴨商業学校設立趣意書における『武士的精神』の意味」『CUC View & Vision』52
- 朽木 量「『家学の書』と遠藤隆吉の儒学思想の系譜」『家学の書』2024年 千葉商科大学総合研究センター 遠藤隆吉研究所資料調査報告 第1号 pp.19-33
- 藤田幽谷「丁巳封事」『日本思想大系53水戸学』1973年 岩波書店
- 前橋市教育史編さん委員会『前橋市教育史』上巻 1986年 前橋市
- 前橋市史編さん委員会『前橋市史』第三巻 1975年 前橋市
- 前橋市史編さん委員会『前橋市史』第四巻 1978年 前橋市

## 遠藤隆吉と福澤諭吉

- 福澤への言及 35箇所  
内訳：著書中 22件32箇所 論文中3件3箇所  
但し、論文は管見の限り
- 実学・実学教育への直接的言及はあまりなく、西郷と併称するものが多い
- 昔の人は皆教育家であつて同時に政治家であつた、日本の福澤先生などは矢張り教育家であつて同時に政治家である。(『社会心理と教育』 - 153・『社会學』 - 101) ⇒ 「治道家」